



2007年12月22日 寄席「雀のおやど」にて

「今、すごいことになってる」。天満天神繁昌亭の開設などで沸く落語ブームを、ちょっと誇らし気に語る桂雀三郎さん(58歳)。「非常に洗練されたお洒落な芸やから、人気があるのは当然やと思う」と胸を張りながらも、「これが続くように頑張らなあかん」と気は緩めない。「歌う落語家」の異名を持ち、高座やステージから、上方落語の普及にいそしんでいる。

落語ブームの中で

昨年5月から、大阪市立城北市民学習センターで寄席「城北にぎわい亭」(隔月)を開いている。これがすこぶる評判である。定員を大幅に超える入場希望があり、今年1月からは公演数を1回から2回に増やした。それでも、昼・夜各回100人に3倍を超える希望者がいるほどだ。

大学に入学した1967年ごろも、落語が少し脚光を浴びていた。関西の各大学に落研(落語研究会)もでき、その目新しさに誘われて入部。興味本位で始めた落語への熱は高まる一方で、本気で落語家になりたいという思いを強めていった。

当時落研の間で絶大な人気があった桂小米(故・桂枝雀)に入門。伊丹にあった師匠の自宅に通い始め、「すごい人についた」とあらためて感服する。「とにかくずーっと稽古してはりました。あんでできる人はちょっとおらんでしょうなあ」。そんな師匠の背中を見て、芸を磨いていった。

弟子から師匠へ

内弟子年季明け以後、「雀三製アルカリ落語の会」「25日間連続落語会」「つるつぱし亭」などと銘打った落語会を精力的にこなし、着実にファンを増やしていく。中でも「雀三製アル

カリ落語の会」は若者が集まる場所で8年続け、新たな客層を開拓した。

54歳の誕生日には、毎月落語会を開ける場所(寄席「雀のおやど」)を贈られた。「誕生日プレゼントに寄席をもるた人はいないんちゃうかな。本当にありがたいこと。毎月一門の勉強会としてやらしてもらいます」。

落語以外にも演劇や音楽界でも異才を発揮。40歳頃から始めたギターの弾き語りには、リピーター山中さんとバンドを組んでメジャーデビューを果たすまでに、オリジナル曲『ヨーデル食べ放題』は12万枚のセールスを記録した。今もライブやディナーショーなどでステージに立つ。

死ぬまで現役で

「伝統芸能だから、師匠から教わったことは伝えていかなあかん」と、三人の弟子をとる。「教えるのは体力も気力もいるし、難儀している」と頭を悩ませながらも、「逆に教えられることも多い。勘でやっていたことが理屈で説明できるようにになった」と手応えをつかむ。

落語家は「反省しない。あかんかったら『今日の客は悪い』で終わり。良かったら『僕の腕ならこんなもんやろ』と思うぐらいがちょうどいい」が持論だ。「反省し過ぎて『もうあかん。酒止めて真面目に稽古しよ』とか思う奴はあきませんねん。『今日は酒飲んで寝たんねん』ぐらいがいい。弟子にも勧めています」とにやり。

「真面目に稽古しても、上手くはなっても面白くはならない。そこが落語の難しいところ。酒を飲みながら、わあわあ楽しく暮す。飲み過ぎて死ぬかも分からへんし、ある意味、命懸けの商売ですな(笑)」。オールバックで後ろ髪をくくったトレードヘアで豪快に笑う。

(文・江中咲紀/表紙写真・高島悠介)

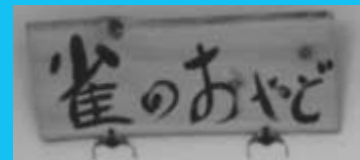
CLOSE
クローズアップ
UP

“終点なき芸の道進む、” 歌う落語家

プロフィール

落語家

かつら じゃく さぶ ろう
桂 雀三郎 さん



【プロフィール】

1949年、大阪府生まれ。大学の落研時代は“京龍亭龍京”の芸名で活躍し、71年に桂小米に入門。86年～93年「雀三製アルカリ落語の会」で毎月新作落語を披露。96年『ヨーデル食べ放題』で歌手デビュー。80年ABC漫才・落語新人コンクールで最優秀新人賞、94年大阪府民劇場奨励賞、2000年上方お笑い大賞最優秀技能賞など受賞。弟子は桂雀喜、桂雀五郎、桂雀太。

【寄席情報】

2月23日＝「第57回つるつぱし亭」
(雀のおやど)

3月1・2日＝しんおん寄席
「雀三郎独演会」
(そごう劇場)

大阪市立城北市民学習センターで隔月、一門による落語会「城北にぎわい亭」(昼・夜2回公演)を開催。次回は3月11日(P8参照)。問い合わせは同センター＝電話06(6951)1324